

むさしの吉祥寺映画フェスティバル

開催日	2012年11月01日～2012年11月03日
開催地	関東 > 東京都 > 武蔵野市
会場	吉祥寺バウスシアター (東京都 > 武蔵野市)武蔵野市内各地
主催者	【むさしの吉祥寺映画フェスティバル実行委員会】実行委員長:本田拓夫(吉祥寺バウスシアター)／副実行委員長:秋田克之(東京武蔵野ライオンズクラブ)／事務局長:小笠原耕司(東京武蔵野ライオンズクラブ)／アドバイザー:布川郁司(日本動画教会)、鈴木仁(東京国際アニメフェア)／宣伝・広報:見木久夫(スイベルアンドノット)／地域協力:武藤毅(武蔵野市観光推進機構)、稲垣英夫(武蔵野商工会議所)、西宮忠(武蔵野商工会議所)／イベント運営:岩村昭英(東京武蔵野ライオンズクラブ)／ムービंपック24:伊藤秀隆(PKシアター)／映画制作学校:末岡一郎(阿佐ヶ谷美術専門学校)／アニメ制作学校:吉田治幸(代々木アニメーション学院)／上映作品手配:瓜生資(O!! iDO 短編映画祭企画運営)／上映等設定:武川寛幸(吉祥寺バウスシアター)、松江勇武(吉祥寺で映画を撮ろう)、樋口泰人(爆音映画祭主催)、星憲一郎(吉祥寺アニメワンダーランド)／協力:後藤敏夫、長谷部繁、後藤登、藤間仁章、中村久文、笹川裕司(東京武蔵野ライオンズクラブ)
URL	http://musashinomovie.com/index.html
概要	「観る映画から創る映画に」をテーマに、クリエイター育成と地域活性を目的とした映画祭の第1回。武蔵野市を舞台に24時間ノンストップで短編映画を制作する「ムービंपック24 in むさ

しの吉祥寺」をメインコンテンツに、プロから映画作りの基礎を学べる「映画・アニメ制作学校」、国内外の映画祭受賞作品の上映会などを実施。「ムービंपック 24」の1日を追った。



カメラ、マイク、レフ板など、各担当者が協力してひとつの作品を作り上げる



ヒロインは地元放送局、むさしのFMの新入社員という設定



最終日の受賞式。上垣組がグランプリを獲得した ©撮影:見木久夫

後援	武蔵野市、財団法人武蔵野市開発公社、武蔵野市商店会連合会、吉祥寺活性化協議会、武蔵野商工会議所、武蔵野市観光推進機構、阿佐ヶ谷美術専門学校、代々木アニメーション学院、小笠原六川国際総合法律事務所、後藤敏夫税理士事務所、株式会社三祐産業、有限会社ぴっくる、有限会社境南建材工業、酒井薬品株式会社、中浜工芸株式会社、櫻井商事株式会社、みずほ銀行吉祥寺・三鷹エリア法人部、秋本歯科医院、株式会社共立ビル、株式会社丸二、有限会社大鵬、多摩信用金庫 武蔵野支店・吉祥寺支店・成蹊学園前支店
協賛	清水商事株式会社、株式会社武蔵境自動車教習所、有限会社永昇工業、新光商事株式会社、株式会社星川商事、藤間流舞踏研究所、雨坪守、税理士小林利治事務所、有限会社つぼみ装飾、吉田公認会計事務所、トミオ建設株式会社大谷直法律事務所、有限会社田辺、有限会社笹川興業（敬称略、順不同）
共催	東京武蔵野ライオンズクラブ
入場料	各コンテンツによる
チケット販売 窓口	映画上映：吉祥寺バウスシアターチケット売場

ターゲット	映像・映画制作に関心がある層
告知宣伝	プレイベントとして「むさしの吉祥寺 24 時間国際映画祭のタベ」(4 月 26 日(木))を開催し、取材した各メディアによる記事紹介、公式サイト、バウスシアター公式ホームページ・市報での告知、商店街や周辺映画館にリーフレットを設置、11 月 2 日(金)朝刊に折込チラシ
制作印刷物	リーフレット(約 3000 枚)、折込チラシ(5,000 枚)、ポスター(約 40 枚)、カタログ(1,000 部)
取材媒体数	10 社
スタッフ数	企画:10 人、運営:100 人(学校運営は 10 人)
会場広さ	収容人数:218 人(吉祥寺バウスシアター)
展示・出展規模	映画上映:34 作品
動員数	600 人
開催期間	3 日間

開催歴	初開催
次回開催	2013 年秋

内容

第 1 回ムービピック 24 in むさしの吉祥寺

吉祥寺・三鷹・武蔵境エリアを舞台に 24 時間以内に短編映画(6～8 分)を制作して、そのクオリティを競う映画制作競技会。事前募集(プロアマ問わず、スタッフ及び機材を自前で調達できることなどが条件)に応募した 9 チームのうち選考を通過した 7 チームが、武蔵野市観光推進機構フィルムコミッションの協力の下、市内の商店街や通り、公園などでロケを敢行。市内各施設やメンバーの自宅で編集作業に取り組み、制作した映画を最終日に上映した。制作の様子は阿佐ヶ谷美術専門学校の生徒が撮影、事務局スタッフが編集してメイキング映像も制作。短編映画と合わせて上映した。

競技方法:

全チーム同時にスタートし、撮影、編集、音楽・効果音入れなどすべての工程を 24 時間以内に終了する。作品のデータをハードディスクに入れて納品したところでゴール。

参加チーム:

東京理科大学映画研究部チーム、阿佐ヶ谷美術専門学校チーム、女子美術大学 ガールズチーム、中根組、九官鳥フィルムズ、にがウーロン、上垣組

参加料:1 チームにつき 10,000 円

審査員:

【委員長】布川郁司(株式会社ぴえろ代表取締役会長 日本動画教会理事長 東北芸術工科大学大学院教授)

【委員】笹谷隆司(プロデューサー)、大鶴義丹(俳優・小説家・映画監督)、藤田佳子(女優・タレント・司会)

賞品:グランプリ 吉祥寺老舗居酒屋の無料飲食チケット 10 万円相当を進呈。国内外の映画関係者や映画祭へ、ムービピック入賞者として推薦サポートを予定。

受賞作:グランプリ 上垣組『Some Day』

スケジュール:

内容	日時	会場
開催セレモニー	11/1(木) 9:30~10:00	吉祥寺バウスシアター1
撮影・編集	11/1(木) 10:00~11/2(金) 10:00	武蔵野市内各所
上映会・受賞式	11/3(土) 17:40~19:40	吉祥寺バウスシアター1
懇親会	11/3(土) 20:00~21:30	商工会館 4F・5F

映画・アニメ制作学校

・映画制作学校

シナリオ作成から、撮影・編集をワークショップ形式で学ぶ。身に付けた知識を自宅で実践できるように、民生用の機材を使用。

日時:11月3日(日) 10:00~16:30

会場:武蔵野公会堂 第一会議室

講師:阿佐ヶ谷美術専門学校講師 末岡一郎

対象:中学生以上

定員:30人

教材費:1人1,000円(テキスト教材代込み)

・アニメ制作学校

イラストレーションを描きながら、アニメーションの基礎を学ぶ。

日時:11月3日(日) 12:30~16:30

会場:武蔵野公会堂 第二会議室

講師:代々木アニメーション学院講師 佐野哲郎

対象:中学生以上

定員:30人

教材費:1人1,000円(テキスト教材代込み)

映画祭受賞作品 上映会 & 受賞式

各映画祭の受賞作品や地元ゆかりの作品を厳選上映。「ムービंपック 24」の結果発表ならびに受賞式も行った。

日時:11月3日(日)

会場:バウスシアター

入場料:各回 1,000 円 ※クロージング作品のみ一般 1,500 円 / 学生 1,300 円 / シニア & 会員 1,000 円

プログラム:

10:00 ～	プログラム A アニメ特集	「吉祥寺 アニメワンダーランド」「東京国際アニメフェア 2012」各受賞作品
12:30 ～	プログラム B 映画祭特集	「O!! iDO 短編映画祭」「オーバーハウゼン国際短編映画祭」各受賞作品
14:50 ～	プログラム C 吉祥寺生まれの映画作品	『あんてるさんの花』(監督:宝来忠昭)特別上映+トークショー(ゲスト:田中美里 ほか)
17:40 ～	プログラム D ムービंपック作品上映	オープニングセレモニー、作品上映、結果発表
20:10 ～	クロージング作品	『エアーズロック～まさかの劇場版』(2012年 / 提供:ガイナックス)



**むさしの吉祥寺映画フェスティバル 副実行委員長、
東京武蔵野ライオンズクラブ 2012～2013 広報 武蔵野コンテンツ 委員長 秋田克之 氏**

映画作りの楽しさを伝えたい

「武蔵野・吉祥寺という街は、ものを作って発信する“川上の街”としてあるべきではないか」—東京武蔵野ライオンズクラブの各メンバーがそんな話で盛り上がり、ほかにない映画祭、この街からスタートするような映画祭を作ろうと企画したのが、この「むさしの吉祥寺映画フェスティバル」です。観るだけの映画祭ではなく、映画を作る課程やその楽しさを伝えられる映画祭があったらおもしろい、武蔵野市・吉祥寺らしいと考えました。

ライオンズクラブの人脈を生かす

もともと、私たちは映画・イベントに関しては素人です。そこで、まずはライオンズクラブの人脈を生かして、街に影響力を持つ方たちにお声掛けしました。そして、吉祥寺バウスシアターの社長、本田拓夫さんに実行委員長になっていただいたことから、映像・イベント関係の専門家にも集まってもらうことができました。武蔵野市観光推進機構フィルムコミッションについては、ライオンズクラブのメンバーの中に同機構の委員が多く、協力を得られやすかったと言えます。

第1回を経て今後の方針を決定

運営に関しては、実行委員会の中で、「ムービピックアップ 24」「映画制作学校」など、各部門に応じて役割分担を決め、それぞれの担当者が責任を持って動いているという形です。もともと、実行委員会ができてたった半年。準備期間が短く、ほかに参考にできる事例がなかったのが、今回はプレオープン的な要素が非常に強いです。「新しい映画祭の発信」「クリエイターの発掘・育成」を目指すという点では一致していますが、今後、行政や商店街との連携をどうしていくのかなど、明確な方針はまだ決まっていないのが現状。第1回を経験して、そこから来年以降の方針が固まってくると思っています。

“ものづくりの街”として周知

誰でも参加していただきたいのですが、特に若い世代、これから成長していく世代にとって、自分たちで考えてものを作り出していけるようなきっかけになれば。武蔵野にはもともとクリエイティブな人が多いとは思いますが、映画祭を通じてこの街が“ものづくりの街”としてさらに認知されるようになれば、クリエイターを目指す人がもっとたくさん集まってきてくれるのではないかと希望を持っています。映画はシナリオ・撮影・音楽など、いろいろな要素が絡む総合芸術なので、その意味からも期待は大きいです。

ムービピック 24 総合演出、PK THEATER 主宰・総合演出 伊藤秀隆 氏

人材育成と町おこしを兼ねたイベント

ただ作品を集めてきて上映するだけの映画祭ではなく、吉祥寺で撮影したご当地映画を作って上映しようという試みが、「ムービピック 24」です。国籍も人種も関係なく、いろいろな人の目で吉祥寺を撮ってほしい。今回、19歳の大学生から、64歳のプロの監督まで参加して、技術的にはすくばらつきがありますが、それはあえて年齢と性別を優先して参加チームを選考したからです。いろいろな人たちが一堂に集まって映画を撮ることで、何か新しい視点が出てくるのではと期待しています。また、吉祥寺がクリエイターを育成する街ということになれば、普段から今以上に多くの人が集まってくるだろうし、受賞者がプロになってから、ここで撮影した作品をほかの映画祭へ出品するといったことも考えられる。さらに、海外からの参加で、この街がロケ地として知られるようになる可能性もある。“人材育成と町おこしは一緒”というのが、この映画祭の考え方です。

観る側から作る側へという意識作り

参加者が24時間の映画制作の過程で試行錯誤する様子は、彼らが作る映画とはまた別のドラマ。そこで、メイキング映像も制作し、映画と一緒に上映したり、次回への周知を兼ねて公式サイトで配信します。また、「ムービピック 24」だけでなく、プロから映像制作について学べる「映画・アニメ制作学校」を設けているのも、この映画祭の大きな特徴。お子様を含めて、まったく機材に触ったことがない方が、自分で作った映像を 유튜브 にアップしたり、ビデオレターを作れるように、基礎をきちんと学んで理解していただくことが目的です。「ムービピック 24」の作り手が映画制作を楽しむ。そして、その映画やメイキング映像を見た方に、「自分でも撮れるんじゃないか」とか「今度は自分が映画を撮ってみよう」と想起させ、ワークショップや「ムービピック 24」への参加を促す。“観るだけでなく、自分たちがどんどん参加していこう”という意識を作っていくのが、これまでの映画祭とは全く違うコンセプトだと言えます。

地元の理解を第一に進行

「ムービピック 24」は商店街をはじめ、地元のご協力があってこそ成り立つものなので、肖像権に関わるようなゲリラ的な撮影はしないという方針で進めました。ロケ地選びにおいては、できるだけ監督の希望に沿うように、地元のご理解と撮影許可をいただいて正式な手続きを踏む必要があります。そこが大変でした。ただ、武蔵野・吉祥寺という街がいろいろな文化が混在していて、多様な価値観を受け入れてくれる場所であるということと、フィルムコミッションが協力してくれたおかげで、想定していた以上にうまくいっていると思います。また、現場では事務局のスタッフが24時間、各班に1人ずつ同行しています。彼らは全員、映像ディレクターなので、プロとして、撮影の際に参加者が暴走しないように目を配ったり、必要に応じて撮影・編集の技術的なアドバイスもできる。また、フィルムコミッションとの連携や、各メディアの取材対応などでも動いてもらっています。

国際映画フェスティバルを目指す

今回、思っていた以上に取材が入るなど、盛り上がっていると感じています。「日本映画専門チャンネル」(BS225ch)の番組「シネホリ DEEP」でも紹介(初回 11 月 24 日深夜放送予定)されるそうで、それだけ注目度が高いのでは。今後は、「クリエイターの育成」という目的に沿って、初心者から「映画・アニメ制作学校」、ワークショップから「ムービंपック 24」へという流れを作るとともに、グランプリ受賞者に対して、次の作品制作での資金援助など、サポート体制を整えていきたい。いろいろな視点から武蔵野・吉祥寺を撮影していただくという点では、まだ東京在住の参加者が多いので、地方あるいは海外の学生や監督にも参加してもらい、将来的には国際映画フェスティバルとして開催できればと思っています。

| 詳細レポート

学生からプロの監督までが参加

「観る映画から創る映画に」をテーマにスタートした、まったく新しいコンセプトの映画祭「むさしの吉祥寺フェスティバル」。そのメインコンテンツとなるのが、24 時間ノンストップで映画制作に挑戦するという異例のコンペティション「24 時間ムービंपック」だ。

撮影から編集まですべてを 24 時間以内に行わなければならないという、まさにスポーツのようなプログラムに参加したのは、学生チーム 3、プロチーム 2、自主制作チーム 2 の計 7 チーム。カメラ・マイク・照明などの機材は自前で用意することが原則だが、貸し出しもある。東京理科大学映画研究部チームは、1 年生 4 人を含む 10 人が参加し、うち 6 人が出演者。「誰も撮ったことがない映画を作りたい」と応募した。一方、今回の最年長、64 歳の上垣保朗監督率いる上垣組は、撮影・編集・出演のほとんどがプロという 12 人のチーム。上垣さんは日活撮影所で長年映画監督を務めていた業界人で、現在、市内に在住。「武蔵野愛」から参加した。

武蔵野市内各所でロケを敢行

経験や技術も違えば、シナリオ・ロケ地・スケジューリングもチームそれぞれ。初日の午前 10 時、全チームが揃って手拍子でカウントダウンを終えたところで、一斉に最初のロケ地へ向かった。東京理科大チームは吉祥寺の名物商店街「サンロード」を中心にロケを実施。アクションがメインのラブストーリーで、高校生のヒロインが黒服の男たちと戦うシーンなどを撮影していった。人通りが多い商店街での注目度は大きい。「何をやっているの?」とわざわざ立ち止まって見物していく人も多く、好意的に捉えている人が多い様子だった。

一方、上垣組は井の頭公園や井の頭自然文化園など、市内の名所を中心にロケを敢行。大学生チームがレフ板の使い方からアングルなど、かなり手間取っていたのに比べ、プロチームはさすがに手馴れていて、ワンカットの撮影が非常に早い。FM 放送局に勤める女性アナウンサーの成長物語とのことで、地元の FM むさしのもロケ地になった。

このほか、大通りや横丁、大学、カラオケボックス、交番など、使用されたロケ地は20数カ所に上る。「武蔵野・吉祥寺は原宿・下北沢のような個性的な場所があったり、昭和の香りが漂う商店街があったり、いろいろな要素がひとつの街にすべて凝縮しているという、ほかにない街。作品によっていろいろな顔が出せるのは、ここならでは」と、伊藤氏は話す。加えて、「創作意欲を応援するような雰囲気が街に流れている」(秋田氏)ことが、新しいチャレンジには最適な場所だった。

もともと、ロケを行うためには、地域住民との共存が必須。特に地域映画祭ということから、この点には非常に気を遣っていた。運営サイドのクリエイターのほか、フィルムコミッションからも実行委員会のメンバー2人がロケに同行。通行の妨げにならないよう、細やかな気配りがされていた。

日が暮れると、すべてのチームが自宅やカラオケボックス、学校などで編集・音入れ作業に没頭。翌日の午前10時のタイムリミットを前に、女子美術大学 ガールズチームを除く6チームがゴールした。

地元や外部クリエイターの協力で成立

リミット制での映画制作は海外ではさほど珍しくはないそうだが、「地域密着という形ではおそらく日本初では」(伊藤氏)とのこと。ライオンズクラブのコネクションを生かし、地元を巻き込んだことが実現へ向けての大きなステップボードとなった。実行委員会の委員長には吉祥寺を代表するカルチャースポット、吉祥寺バウスシアターの社長である本田拓夫氏が就任。同シアターは上映会の会場ともなった。また、阿佐ヶ谷美術専門学校は「映画・アニメ制作学校」や「ムービंपック24」のメイキング、撮影機材や編集用パソコンの貸し出しなど、多方面で支援した。もともと、武蔵野市は制作会社が多く、アニメ・音楽・美術・映画など、アート系イベントが盛んに行われているという土壌もある。「O!! iDO 短編映画祭」「吉祥寺で映画を撮ろう」など、先行の映画祭の関係者も加わった。

一方、ムービंपック24 総合演出である伊藤氏をはじめ、参加チームへの同行や提出された作品の画質調整などで、外部クリエイターも多数協力した。伊藤氏はフジテレビ内定者研修講師や映画祭のアドバイザーとしても活動する、いわば映像制作・イベントの専門家。地元の実行委員会と外部クリエイターの“つなぎ役”になったが、アイデアを精査し、イベント運営を円滑にするには、プロの視点が加わったことが大きかった。

「プレイベント」から規模の拡大へ

ただ、開催に至るまでにはさまざまな試行錯誤があったそうだ。当初は市民映画祭としての盛り上がりを生み出すため、「ムービंपック24」では当日の市民参加やライブ中継も企画していたが、技術面と予算上の都合から断念。市民参加については、「映画・アニメ制作学校」として独立させ、誰でも手軽に映画作りの楽しさを学べるようにした。ライブ中継は相応な機材が必要で、今後の検討課題だ。また、ノンジャンルで募集したものの、今回の「ムービंपック24」の応募作品はいずれ

も実写だったが、今後は制作に時間がかかるアニメ作品でも応募しやすい体制を整えていくという。

インタビューした2人が口を揃えたのは、「今回はプレイベントの段階」ということ。まずは実績を作った上で課題を改善、今後の方向性もふまえて数あるアイデアを検討していくとのことだった。「今回はライオンズクラブを中心とした市民の方たちからのカンパと各スタッフの手弁当で運営している状態。これを成功させることが、予算を含めて次の映画祭をどのように広げていくかへつながると思っています」(伊藤氏)。

デジタル全盛の今、動画サイトに個人が制作した映像があまた流れているように、映像制作は誰にでも身近なものになっている。しかし、正式なロケの許可を取って撮影に挑戦し、作品を映画館というオープンな空間で上映する機会はあるものではない。「ムービंपック24」を核とした「むさしの吉祥寺映画フェスティバル」は、そうした場を求める人たちへの、格好の機会提供となった。映像制作が身近なものであるだけに、周知によっては潜在層を呼び込み、より多くの参加が望めるだろう。「プレイベント」を経て軌道にのれば、武蔵野市という枠組みを越えた盛り上がり生まれそうだ。

(2012年11月1日(木) 安江めぐみ)



主会場となった吉祥寺バウスシアターに映画祭の案内を掲示



「ムービピックアップ 24」は商店街をはじめ武蔵野市内のさまざまな場所でロケを敢行



東京理科大学映画研究部チームは今回のために高級機材をレンタル



出演者に演技をつける撮影担当者



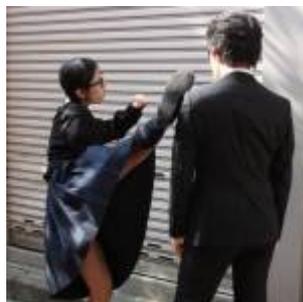
ロケの様子は阿佐ヶ谷美術専門学校の生徒が撮影してメイキング映像を作成した



街中で行われたロケは通行人から大きな注目を集めていた



カメラ、マイク、レフ板など、各担当者が協力してひとつの作品を作り上げる



路上で女子高生が男性ボディガードを次々と倒していくというアクションが展開



映画監督・上垣保朗さん(右)も参加。井の頭公園など市内各地でロケを行った



ドラマや映画でロケ地に使用されてきた井の頭公園は印象的な場所があちこちにある



移動中、テレビ局の取材を受ける上垣監督は参加者最高齢の64歳



井の頭公園に隣接する井の頭自然文化園では象を前に撮影



ヒロインは地元放送局、むさしのFMの新入社員という設定



プロのアナウンサー(右)にも出演してもらい、アドリブでセリフを制作



最終日の受賞式。上垣組がグランプリを獲得した ©撮影:見木久夫